

## 【4 八女市 Yame City】



松尾 健介氏

飛形山の展望カフェから

八女市では、空気が非常に澄んでいる日には、名産のお茶を栽培する八女中央大茶園、飛形山の飛形自然公園、遠くは市東端（大分県境）の御前岳や釈迦岳（本県最高峰）などから“北東面の雲仙岳”が眺望できます。意外なところでは、九州自動車道の八女 IC 付近から高速道路上にそびえる雲仙岳（↓）が眺望できます。また、飛形山の展望台や九州自動車道、御前岳や釈迦岳からは、阿蘇山も眺望できることがあり、阿蘇山と雲仙岳の間の歴史的な大三角形（※阿蘇地域のページ参照）を視覚的にイメージすることが可能です。

八女市内にある九州最大級の前方後円墳“岩戸山古墳”は、6世紀初頭に九州北部を支配し、大和朝廷から反乱者と見なされた豪族“筑紫君・磐井（つくしのきみ・いわい）”の墳墓とされていますが、筑紫君磐井は阿蘇山・雲仙岳がそびえる“火の国”（肥の国）も影響下に置いていたとされ、古代に九州北部で起こっていた歴史ドラマに想像が膨らみます。

日本茶の生産は、平安末期に中国の宋で学んだ僧・栄西（臨済宗の開祖）が、帰国後に脊振山（せぶりさん、福岡・佐賀の県境）にお茶の種を播いたのが始まりとされ、八女茶の生産は、室町時代に中国の明で修行した僧・周瑞が、帰国後に本市の黒木町に靈巖寺を建立し、お茶の栽培・製茶の技法を伝えたのが始まりとされています。靈巖寺の奥にそびえる御前岳・釈迦岳の山頂部からは脊振山と雲仙岳が眺望でき、脊振山からも雲仙岳が眺望できますが、これらの山々が互いに見える西九州の一带には、八女茶、嬉野茶、彼杵茶、雲仙茶などお茶の生産地が広がっています。雲仙岳は古代中国にて“日本山”と呼ばれた中国方面からの窓口の山であり、御前岳・釈迦岳の山頂部から雲仙岳・脊振山を眺めれば、中国文化が各時代に九州へ入って来た歴史に思いを馳せることができます。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、八女市内を旅してみませんか？

- 八女市の観光情報はこちら ⇒ 八女市茶のくに観光案内所 <http://yame.travel/>



富安 一夫氏

八女 IC 付近から